

平安朝恋歌の「…人」表現

—その傾向と「つれなき人」をめぐって—

倉田 実

はじめに

表題にした「…人」表現とは、「つらき人」「通ひし人」「言はで物思ふ人」などというように、一語以上の多様な修飾語が「人」という語にかかることによつて、人物を説明的に指示する形式のことである。したがつて、修飾語に下接せず、単独で使用される場合は、「…人」表現の範疇に入らない。例に挙げた「通ひし人」「言はで物思ふ人」などは、これ全体で一語的に働くものであり、凝集性・膠着性に富んだ表現形式といえよう。こうした「…人」表現については、『源氏物語』や『狭衣物語』などの「散文作品」において、いささか検討したことがあるが(1)、和歌において、どのように問題にしえるのかをここで考えてみたい。三十一文字で構成される和歌においても、その内部に多様な「…人」表現が認められるからである。具体例で確認しておきたい。

音なしの川とぞつひにながれける言はで物思ふ人の涙は

(拾遺・恋二・七五〇・元輔)

この歌の場合、四句から結句にわたつて認められる「言はで物思ふ人」の部分で、ここでいう「…人」表現になる。「言はで物思ふ」で息づきをして、「人の涙は」と読むこともありえるが、ここでは五七調とか七五調などとする律調性は度外視である。句をまたがつていても、「言は

で物思ふ」が「人」にかかつて修飾し、「言はで物思ふ人」全体で一語的に凝集されていると認定したのである。こうしてみると、和歌においても、その内部に「…人」表現は認定できるのであり、これ以外にも多種多様な用例が検索できる。これらの用例の中には、歌ことばと認定してもいいような場合もあり、「…人」表現のそれなりの検討が要請されると思われる。そこで、和歌史的な整理のしやすい八代集を取り上げ、その恋歌に絞つて、まず「…人」表現の概略をたどることにしたい。八代集全体を対象にすると用例が多く、問題の所在が分かりにくくなる恐れがあり、ひとまず恋歌に焦点をあて、四季歌やその他は別の機会に譲ることにする。なお、テキストは新編国歌大観を使用した。表記は私に変えた。

一 八代集恋歌の「…人」表現

八代集の恋歌において、恋する自身やその相手が、どのように指示・把握されるのかを、「…人」表現から検討することになるが、なぜ「人」なのかについて簡単に触れておきたい。「…人」の形で指示される人物は、一人称でも二人称でも三人称でも可能であり、いわば不定称である。この点が、「…君」や「…妹」「…背」と違って、これらの場合は二人称的な使用となり、その相手は特定された人物になる。これに対して

「…人」の場合は、不定称であることよって、自身や相手のありようを臚化して、三人称的に提示できる利点がある。だから、人間のありようとして一般化や普遍化ができるのであり、表現の広がりをもたせられる。具体的な恋の関係においても、その個別的なありようを超えて、人間一般の恋の諸相として普遍化され得る。だから、実際の用例でも、「…君」や「…妹」「…背」の使用は少なく、「…人」が圧倒的なのである。そして、この表現の形で恋する自身やその相手が、関係性を指示する多様な語彙と結合して提示され、恋の様々な段階や心情が詠出されることになる。

では、どのような語彙が使用されて「…人」表現の形になるかになる。最初に確認しておきたいのは、用例の認定とその整理の仕方である。ここでは問題の所在をはっきりさせるために、単純化した形で「…人」表現を認定したい。『古今集』から例歌を挙げて、認定の仕方を確認しておく。

世の中はかくこそありけれ吹く風の目に見ぬ人も恋しかりけり

(古今・恋一・四七五・貫之)

見ずもあらず見もせぬ人の恋しくはあやなく今日やながめ暮さむ

(古今・恋一・四七六・業平)

山桜霞の間よりほのかにも見てし人こそ恋しかりけれ

(古今・恋一・四七九・貫之)

陸奥の安積の沼の花かつみかつ見る人に恋ひやわたらむ

(古今・恋四・六七七・よみ人知らず)

右の歌で傍線を付した部分が本来的な「…人」表現として認定できるが、以上の例をすべて「見る人系列」として、ここでは処理していきたくない。「目に見ぬ人」「ほのかにも見てし人」の形のままでなく、「目に」や「ほのかにも」などの上接する語や、助詞・助動詞などを無視して、「見る人」とするのである。「見る人」と「見ぬ人」では、正反対の意味になるが、あえて単純化していききたい。同じように、「来る人」と「来る人」、「知る人」と「知らぬ人」、「思ふ人」と「思はぬ人」なども、そ

れぞれ「来る人系列」「知る人系列」「思ふ人系列」として認定する。どのような語彙が「人」にかかるかを、ひとまずここでは問題にしたいからである。また、「思ひ知る人」などの場合は、「思ひを知る人」の意であるので、「思ひ」を外して「知る人系列」と単純化し、「思ひやみにし人」の場合は「やみにし人」では意が通らないので、「思ふ人系列」の中に入れることにする。先の例歌の「言はで物思ふ人」の場合は、これで一語としたところだが、これも「物思ふ人系列」として考え、「思ふ人系列」とは区別したい。「物思ふ人」の八代集での用例は、すべて詠者自身を象るからになるが、「思ふ人系列」などについては、別途に考えたい。なお、「…人の心」と続く場合、多くは「人の心」で一語と認定すべきであり、「…人」表現ではなく「…人の心」表現になるが、ここではあえて「…人」表現の中に加えて考えたい。要は、どのような語彙と「人」が結びついているかであり、ここで言うのは単純化した場合の傾向の把握になる。

こうした前提で、八代集から用例を拾うことになるが、『拾遺集』だけにある「雑恋」とする部立は除外して、「恋」部だけにしたい。また、『金葉集』は二奏本を使用した。そうすると、次のような歌集別の種類の内訳になる。総計の種類は、延べではなく、異なりの数になる。

古今集	…16種類 36首
後撰集	…27種類 42首
拾遺集	…30種類 50首
後拾遺集	…18種類 29首
金葉集	…14種類 19首
詞花集	…10種類 11首
千載集	…17種類 32首
新古今集	…25種類 42首
総計	…90種類 261首

これらの90種類の用例すべてを挙げてても煩瑣になるばかりなので、用例の多いものを整理すると次の表のようになる。数字は用例数(歌数)で

あり、空欄は用例ナシである。

系列	古今	後撰	拾遺	後拾	金葉	詞花	千載	新古	総計
つれなき人系列	9	4	1	5	2	2	8	2	33
思ふ人系列	4	3	7	3	1		1	4	23
知る人系列	3	2	2	4	1		4	3	19
恋しき人系列	2		5	2	3		4	1	17
見る人系列	4	3	3	2			1	3	16
来る人系列	3	2	4			1		3	13
待つ人系列		1	1	1				4	8
忘る人系列			1	2			2	3	8
問ふ人系列			1		1			5	7
憂き人系列							3	2	6
頼む人系列		3		1				1	5
つらき人系列	1		2	1	1	1		1	5
物思ふ人系列			3	1		1		1	5

用例総数(歌数)が5例以上のものに限ったが、表に挙げた以外は単発的といってもいい用例になる。一つの勅撰集に表以外の用例が突発的に多く使用されることはない。単純化した「…人」表現に限定してのことになるが、恋の当事者たちを指示する語彙は、表中のものが中心である。なお、ここで「頼む人系列(全5例)」としたが、「頼めし人(4例)」と「頼めおく人(1)」なので、「頼めし人系列」とした方が適切だが、他の場合も含めて単純化した形で系列名とした。

一番頻度が高いのが、「つれなき人系列」で、ここには、「つれなき人(21例)」「つれもなき人(10例)」「つれもなくなりゆく人(1例)」「つれもなくなりぬる人(1例)」の形が入っている。「つれなし」以外の「…人」表現を構成する主要な語彙は、上位6例ぐらいとするのが妥当であろう。この六語が、多様に修飾され、活用されて使用されている

のである。

八代集全体にわたる用例も「つれなき人系列」だけになり、他の用例はないが、これは『詞花集』の歌数の少なさがネックになっていよう。そうになると、「思ふ人系列」と「知る人系列」も繰り返し使用された形となる。しかし、『詞花集』の歌数の少なさであつても「つれなき人系列」だけが、ここでも使用されていることは注意されよう。この「つれなき人系列」については、章を改めて考えたい。

「思ふ人系列」に用例が続くのは、「思ふ」が「知・情・意」を含めた広範な内面を表現でき、また、その内面が、心中にわたかまる状態から外部に顕在化するに至るまでの、いずれの段階でも使用できることによつていよう。恋が意識化されてもされていなくてもよく、また、片恋でも逢恋でも「思ふ」は使用できるのである。語の持つ汎用的な意味性が、用例を続けさせていよう。

一方、「知る人系列」は、偏った用法のまま持続的に用例が続いている。この系列19例の内訳は、「知る人」16例、「知らぬ人」3例になり、「知る人」のほとんどは「なし」や「あらば」に接続しており、「知る人」は不在である。「知る」には、人を領有する、結婚している、の意もあるが、その用法は「知る人系列」に皆無である。「知る人」になるのは、恋の相手ではなく、ほとんどが自身の恋心を知ってくれる他人となる。片恋、忍ぶ恋で使用されるのであり、恋の孤独を「知る人のなき」などの形で表出するわけである。「知る人」が恋の相手になる用法は、八代集では次の歌だけになるが、この場合も「知る」は結婚するの意ではなく、思いを「知る」意になる。

心かけたる人につかはしける

汲みて知る人もあらなん夏山の木の下水は草がくれつつ

(後拾遺・恋一・六一五・藤原長能)

思ひ知る人ありあけの夜なりせばつきせず身をば恨みざらまし

(新古・恋二・一一四八・西行法師)

長能歌は、「心かけたる人」への贈歌であり、庶幾される「汲みて知

る人」にその人がなつてほしいのである。西行歌の「思ひ知る人」は、他人でもないようだが、「一番庶幾されているのは、恋の相手になろう。

恋の様々な段階や様相を詠むに際して、当事者をどのように指示するかは恣意的であるはずだが、先の表にもどれば、そこからおのずと傾向性が窺える。まず言えることは、動詞と結びつく「…人」表現が多さに比べて、形容詞と結びつくのが少ないことである。表では、「つれなき人系列」「恋しき人系列」「つらき人系列」「憂き人系列」だけが形容詞になるが、「恋しき人系列」のなかには、「恋ふ人系列」とした方が妥当な、「恋ひせし人」「恋ひわたる人」「恋ひする人」「恋ひ初めし人」「恋ひせぬ人」がそれぞれ一例ずつあり、形容詞の実数はもつと少なくなる。表以外の例では、「同じ人」「めづらしき人」(以上、古今に一例ずつ)、「雲居に遠き人」「憎からぬ人」「はかなき人」「はるけき人」(以上、後撰に一例ずつ)、「うつくしき人」「苦しがるらん人」(以上、拾遺に一例ずつ)などがあるだけで、表現性はあまりない。形容動詞にしても、「あだ人」(古今・後撰に一例ずつ)、「おほよそ人」(拾遺一例)、「あだなりし人」(金葉一例)だけになる。総じて、「後拾遺集」以降の形容詞に拠った「…人」表現は、「つれなし」「恋し」「憂し」「つらし」だけになり、三代集に少ないながらもそれなりにあつた多様性は、整理されてきたことになる。また、八代集を通じてコンスタントに使用されたのもこの四語になる。

形容詞を使用するということは、恋情・心情や性情などの状態、あるいは、容貌・容姿の状態などから当事者を指示することになるが、この四語は、当事者の容貌・容姿などからその人を捉える語彙ではない。恋歌には、その人なりの容貌は詠まれないのである。また、恋情や心情にしても、前向きに働く語彙は「恋し」だけであり、表以外でも先の「うつくしき人」のみになる。残りの三語は、すべてままならない恋の心情を示す語彙となる。そして、この中で恒常的に使用されたのは「つれなし」だけであつた。

形容詞と違って動詞と結びつく「…人」表現は、行為・行動のあり方

によって指示するものであり、形容詞以上に当事者同士の具体的な関係性をより強く例示する。そして、その関係性は、結婚という「制度」がおのずと反映している。三代集などに見られる「…人」表現の用例を取り出してみると、多くの場合に妻問婚の習俗が反映している。

⑦ 思ひやる境はるかになりやする恋ふ夢路に逢ふ人のなき

(古今・恋一・五二四・よみ人知らず)

① 一人してものを思へば秋の田の稲葉のそよと言ふ人のなき

(古今・恋一・五八四・よみ人知らず)

② 月夜には来ぬ人待たるかき曇り雨も降らなむわびつつも寝む

(古今・恋五・七七五・よみ人知らず)

⑤ 三輪の山いかに待ち見む年経とも尋ぬる人もあらじと思へば

(古今・恋五・七八〇・伊勢)

④ 待たざりしあきは来ぬれど見し人の心はよそになりもゆくかな

(後撰・恋四・八四一・なかがむすめ)

② 今更に問ふべき人も思はず八重律して門させりてへ

(拾遺・恋一・七七五・よみ人知らず)

右のような歌の背景にあるのは、妻問婚の習俗であることは間違いないまい。⑦「恋ふ夢路に逢ふ人」は、「恋う夢路に尋ねて来て逢う人」であり、①「そよと言ふ人」は、「尋ねてくれてそうだと行ってくれる人」の意になる。②「来ぬ人」、⑤「尋ぬる人」は、文字通り男のことである。④「見し人」は、通つて来ていた人の意で、男になる。「見る人系列」には、結婚の意ではなく、単に姿を見る、見ないの意で使用される場合も多くあるが、結婚の意で働く場合のそもそものは男の通いである。④「問ふべき人」も、尋ねてくれる男である。

こうして見ると動詞使用の上位にある「見る人」「来る人」「待つ人」「問ふ人」は、男が女の元に通う、通わないの意が働くものであり、妻問婚の習俗の反映であることは確かである。また、⑦「逢ふ人」、①「言ふ人」のような場合にも、この意味合いが根底にあった。男が女のもとを訪れることによって成立する男女関係であるからこそ、男が来るか来

ないかが最重要の課題になり、それがこうした表現を支えている。男女の関係性は、男の行為・行動に左右されるのであり、こうした用例は、文化記号でもあるわけである。

三代集の時代を過ぎ、同居婚に移行していくと、通いはなくなっていくが、以上のような語彙が使用されなくなるわけではない。例えば、「来る人系列」などは、『新古今集』で「来ぬ人」の形で三例（二二八三・二二八七・一三三二番歌）詠まれている。これは「来ぬ人」自体が歌語化して類型化された事情を想定させるが、その他の語彙でもどのよう¹⁹に推移したのかが問われよう。しかし、問題が拡散するので、以上の概略にとどめたい。恋歌における「：人」表現の傾向は、ひとまず男女の関係性のありように依拠して使用されていたと把握できよう。

二 「つれなき人」の語義と用法

八代集恋歌において、「：人」表現の傾向がいかなるものであったかのほんの概略だけをたどってきたが、愛情のままならない恋の相手をする場合と、「来ぬ人」「思はぬ人」「忘れゆく人」「離れにし人」などと動詞を使用する場合とがあり、多様な指示の仕方が可能であった。こうした多様性のなかで、「つれなき人系列」の形が八代集恋歌で一番多く使用されていた。愛用された、使いやすい歌ことばであったからになるが、その理由は幾つか考えられるようである。

「つれなき人」は、無情な人、冷淡な人、などと訳されるが、それは、こちら側の働きかけに対して相手が冷淡だという関係性に依拠しての意であり、人の本性として情を解さない人という意ではない。男歌でも女歌でも使用され、「つれなき人」とされるだけで、男女いづれにせよ、かいてもなく愛情を訴え続けていたという関係性とそれまでの時間の経過というドラマが前提とされる含蓄のある言い方になる。

冷淡な人という意を表わす場合、「憂き人」「つらき人」なども可能で

あったが、これらはあまり使用されてはいない。「憂き人」は六例あったが、このうち五例は『千載集』と『新古今集』に集中しており、「憂き人」とする把握は、三代集あたりでは馴染みではないのである。「つらき人」も使いやすい言葉と思われるものの、五例しか認められない。

死出の山麓を見てぞ帰りにしつらき人よりまづ越えじとて

古今・恋五・七八九・兵衛

われといかでつれなくなりて心みんつらき人こそ忘れがたけれ

（後拾遺・恋四・七七六・和泉式部）

こうした歌に見られる「つらき人」には、相手の冷淡さを責める度合いが強まるのに対して、「つれなき人」の方は、相手の冷淡さを受身的に把握する傾向になる。能動的であるよりは、受身的であることを好む日本人の性向が、「つらき人」よりも「つれなき人」の方を多くしているよう。また、そうした性向が「つらき人」も「つれなき人」と同じ意味合いで使用することもありえていた。

つらきをも思ひ知るやは我がためにつらき人しも我を恨むる

（拾遺・恋五・九四七・よみ人知らず）

この歌の場合、「上の「つらし」は苦悩の意だが、（下の「注」この「つらし」は無情・冷淡な意（新大系）とされる通り、「つらき人」は「つれなき人」と同義である。「拾遺集」の頃から、「対自的な恋歌に「辛し」を用いることが多くなる」（『歌ことば歌枕大辞典』）とする指摘もこのことと関連しよう。「つらき人」はそれなりに使用されたものの、相手の仕打ちの冷淡さや薄情さを言う場合は、「つれなき人」とする指示の仕方が歌ことばとしての類型になったのだと思われる。

また、「つれなき人」は、恋の初期にも、はかなく終わろうとする段階でも使用が可能であり、こうした汎用性が好まれた理由ともなろう。片恋の段階では、求愛に応じてくれない人として使用できる。

つれもなき人を恋ふとて山彦の答へするまで嘆きつるかな

（古今・恋一・五二一・よみ人知らず）

男女どちらの歌が難しいが、「つれなき人」ゆえに恋心が通じなく、

何度も求愛し続けてきたという経過があり、そのために山彦が答えるほど大きなため息をもらしてしまっただけである。片恋で、相手はまだまだ「つれなき人」なのである。恋の終りでは、次のような歌がある。

我が宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせし間に

(古今・恋五・七七〇・僧止遍照)

これは女の立場で詠んだ、恋が終わろうとする段階になる。妻問婚の時代なので、「待つ」とは、女が男の訪れを期待していること。しかし、自分の家には草が生い茂り道もわからないほど荒れ果てるまで、男の訪れはないとしている。待つ女の心のドラマが内在し、男はもうすっかり「つれなき人」なのである。恋の初期から終焉まで汎用できる便利さが「つれなき人」にはあり、そのために慣用された事情が想定される。

「つれなき人」とするそこには、男女の関係性・物語性や時間の経過

	歌数	部立	「つれなき人」系列が使用される歌番号
古今	9	恋一 恋二 恋五	四八六 五二〇 五二一 五五五 六〇二 七七〇 七八八 八〇一 八〇二
後撰	4	恋一 恋三 恋五	五九二 七三三 七八〇 九七七
拾遺	1	恋一	六四一
後拾	5	恋一 恋二	六四五 六四六 六五七 六六二 六七四
金葉	2	恋上	三五九 三七四
詞花	2	恋上	一九三 二〇九
千載	8	恋一 恋二	六五三 六六九 七二二 七二二 七三二 七五八 七七一 七八二
新古今	2	恋一 恋二	一〇七六 一一四六

が内在し、また、受身的に把握される情趣性が認められるようだが、こうした性格は、ひとまず古今的表現の特質と押さえることが可能であろう。「つれなき人」は、まさに古今的世界にふさわしい歌ことばであったことになる。「古今集」で愛用されたからこそ、その規範性によって八代集を通して使用されることになったと考えられよう。しかし、八代集においてもそれなりの詠風の変化も指摘できるようであり、章を改めてさらに考えていきたい。なお、歌番号で八代集における所在を上表のように整理しておく。傍線を付した二例は、「つれ(も)なき人」以外の形である。以下、八代集の歌をそれなりにたどりつつ、詠風のあり方や変遷をたどっていききたい。なお、「つれもなき人」の形であっても、ここでは「つれなき人」として扱っていく。

三 三代集の「つれなき人」

『古今集』恋部は、恋の始まりから終焉までの経過が整然と配列されているが、「つれなき人」歌もそれと見合った意味合いで詠まれている。恋の初期では恋心が伝わらない嘆きが、恋が成立すると愛情を頼みにする思いが、終局では諦めが詠まれるようであり、それぞれにおいて「つれなき人」である。

① つれもなき人をやねたく白露のおくとは嘆き寝とはしのばむ

(古今・恋一・四八六・よみ人知らず)

② 来む世にもはやなりなむ目の前につれなき人を昔と思はむ

(古今・恋一・五二〇・よみ人知らず)

③ つれもなき人を恋ふとて山彦の答へするまで嘆きつるかな

(古今・恋一・五二一・よみ人知らず)

恋一では、恋情を訴え続けても相手には一向に通じなく、その人は「つれなき人」のままである。①は、「つれなき人」ゆえに、起きては嘆き、寝ては偲びという状態の継続が暗示され、物語的なドラマが内在している。②は、「来む世(未来説と来世説あり)」になれば、現在目の前

にいて愛情に應えてくれない「つれなき人」は、昔の人と思えるからだとしてゐる。恋五にあつてもおかしくない歌だが、恋一にあるので、愛情成立を断念した「逢はざる恋」として位置付けられていることになる。「つれなき人」への嘆きが忘れられるように、「來む世」が期待されるのである。時間の経過が、恋の嘆きを解消してくれるという発想になる。③は前章で触れたが、①とおなじく「嘆き」があり、両歌とも愛情が通じない嘆きが主題化されている。総じて、巻一の「つれなき人」は、「嘆き」の対象として捉えられていると言えよう。なお、②と③、後に触れる⑧と⑨は、それぞれ併置されており、わずかに二首の連続だが、「つれなき人」が主題化されていると言えらるう。

愛情関係が成立すると、相手の愛情を頼みにする心情とともに、「つれなき人」を何とかして自分に振り向かせようとする思いが詠まれる。

④秋風の身に寒ければつれもなき人をぞ頼む暮るる夜」とに

(古今・恋一・五五五・素性法師)

⑤月影に我が身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む

(古今・恋一・六〇二・忠安)

④は、秋風が吹き人恋しくなると、「つれなき人」でも「頼む」とするものであり、夜毎に愛情を期待する、待つ女の歌にならう。ここにも時間の経過、待つ心のドラマが「つれなき人」ゆえにもたらされている。⑤は、「月影」に我が身を変えたなら、「つれなき人」も「あはれ」と見てくれるだろうかとするもので、相手を何とかして自分に振り向かせたいのである。愛情関係が成立すると、「つれなき人」ゆえに、強く愛情を求め、それを頼みにしたのである。

恋五になると、恋の終局や結末が詠まれるようになるが、「つれなき人」も、恋一のように愛情を訴えても應えてくれない人の意ではなく、すでに愛情が薄れてしまった人としてある。

⑥我が宿は道もなきまで荒れにけりつれなき人を待つとせし間に

(古今・恋五・七七〇・僧正遍照)

⑦つれもなくなりゆく人の言の葉ぞ秋より先の紅葉なりける

(古今・恋五・七八八・源宗千朝臣)

⑧忘れ草枯れもやするとつれもなき人の心は霜は置かなむ

(古今・恋五・八〇一・宗千朝臣)

⑨忘れ草何をか種と思ひしはつれなき人の心なりけり

(古今・恋五・八〇二・素性法師)

⑥は、前章で触れた。⑦は、「つれもなくなりゆく人」の形をとることで、愛情がだんだんと薄れていく過程を表現しているようである。また、薄れていくからこそ、色変りする紅葉によそえられて、その人の言葉に対する不信が言われるのである。見方を換えれば、「つれもなくなりゆく人」になる所以を、その「言の葉」の移ろいから理會しようとするものであり、理知的な発想になる。この理知性は、⑧⑨にも認められる。⑧は⑦と同じく宗千の歌であり、現存詠歌数は少ないものの、「つれなき人」を好んで使用した様子が想定されよう。忘れ草が生えるから「つれもなき人の心」になるのであり、霜が忘れ草に降りて枯らせば、愛情が復活するかも知れないとしているが、それははかない望みなのであろう。⑨は、忘れ草の種は、「つれなき人の心」だったのだとして、忘れ草になる所以を理會している。この⑨の詠者素性法師は、⑥の詠者僧正遍照の子であり、それが歌語を共通にさせていると想定できよう。恋五の段階では、恋が終末を迎えており、なぜそうなったかの所以を理知的に探ろうとするのである。その理知を支えているのは、恋を断念した諦念であるかも知れない。

『古今集』の「つれなき人」は、恋一では嘆きで、恋二では頼みで、恋五では理知と諦念で、それぞれ捉えられていたことになる。また、「つれなき人」のありようを直接的に恨むようなことはなく、あくまでも詠者の心のあり方として詠出されており、「つれなき人の心」を詠んでも、比重はその心を理會しようとする自身の方であった。対他的であるより、対自的なのであり、ここが『古今集』の特徴なのである。

* * *

『後撰集』『拾遺集』の「つれなき人」は、基本的には『古今集』と

同じ使用法であり、「つれなき人」に対する自身のあり方が問題にされて詠出されている。

⑩ づらからば同じ心にづらからんつれなき人を恋ひんともせず

(後撰・恋一・五九二・よみ人知らず)

⑪ つれもなき人に負けじとせし程に我もあだ名は立ちぞしにける

(後撰・恋三・七三三・藤原清正)

⑫ 忘れなんと思ふ心のやすからばつれなき人を恨みましやは

(後撰・恋三・七八〇・よみ人知らず)

⑬ 数ならぬ身はうき草となりななんつれなき人によるべ知られじ

(後撰・恋一・九七七・よみ人知らず)

⑭ 音にのみ聞きつる恋を人知れずつれなき人にならひぬるかな

(拾遺・恋一・六四一・よみ人知らず)

⑩は、「人の上の事とし言へば知らぬかな君も恋する折もこそあれ」の贈歌に答えた女の歌として配置されているが、物語の共用もなく対応の仕方が分かりにくい。本来の贈答歌であるならば、物語的な隠された背景を想定せざるを得ないところである。また、冷え切ったような女の歌であり、やや古今調からずれているかも知れない。この歌には「つれなき人」のありようを責める面が表出されているが、その点よりも「恋ひんともせず」と決意する自身に回帰しており、この回帰する事情は⑪から⑭の歌に共通している。⑪は、「つれなき人」ゆえに愛情を訴え続け、その為に自分に「あだ名」が立ってしまったとし、回帰するのは相手に執着してしまう自身のあり方である。⑫は、「男の心つらく思ひ離れにけるを、女、「なをざりに、などか音もせぬ」と言ひつかはしたりければ」との詞書があり、男の歌になる。「つれなき人」だから忘れてしまおうと思っても、それができない執着心があるからこそ、恨んでしまうのですとする。愛情の破綻は、詞書からすれば男に原因があるが、女への執着を逆説的に仮構することによって、言い訳にしているように⑪と⑫には、恋ゆえの執着が詠出されていたが、⑬になると、「寄る辺」を知られないように、浮き草となってしまうたいとして、執着を断ち切

ろうとする思いになる。しかし、これも「うき草となりななん」と期待されるものであり、執着の表現と見ることもできよう。『古今集』にあった、「つれなき人」を頼みにしたい思いが、『後撰集』では執着として表現されていると見ることが出来る。

『拾遺集』では、⑭のみが「つれなき人」詠になる。初二句の「音にのみ聞きつる恋」は、歌題としてのそれではなく、他人事として聞いていた恋のづらさの意であり、それを「つれなき人」ゆえに自身も味わうことになったとする。この歌も「つれなき人」を責める度合いよりも、自身の辛さを反芻する思いに焦点があろう。

『古今集』から『拾遺集』は、三代集として一括されるが、「つれなき人」の表現性を見るだけでもこの三集にはそれほどの径庭はないと言えよう。

なお、『拾遺集』のみにある「雑恋」部の「つれなき人」詠は、次の三首である。

稲荷山社の数を人間はばつれなき人をみつと答へむ

(拾遺・雑恋・二二一・平定文)

いつしかも筑摩の祭早せんつれなき人の鍋の数見む

(拾遺・雑恋・二一九・よみ人知らず)

君見れば結ぶの神ぞうらめしきつれなき人を何作りけん

(拾遺・雑恋・二二六・よみ人知らず)

いずれも諧謔性や遊戯性が強く、こうした歌を収載するとすれば、正統的な恋歌と齟齬を来たすことは間違いないであろう。「雑恋」が要請された理由も歌自体のあり方から納得できるのである。

四 『後拾遺集』から『詞花集』まで

『古今集』では、恋の相手が「つれなき人」であっても、対他的に恨みづらみを訴えるようなことをせず、自身の嘆きや諦念のありようを対象化していた。『後撰集』では恋ゆえの執着も見られたが、基本的な詠

風は、自身に回帰するものであった。それが、『後拾遺集』にもなると、相手への直接的な恨みが詠まれるようになる。三代集からの詠風の変化はすでに藤原俊成『古来風体抄』以来の定説であるが、「つれなき人」詠からでも首肯できよう。

⑮ 恋してふことを知らでややみなましつれなき人のなき世なりせば

(後拾・恋一・六四五・永源法師)

⑯ つれもなき人もあはれといひてまし恋する程を知らせだにせば

(後拾・恋一・六四六・赤染衛門)

⑰ 恋死なむ命はことの数ならでつれなき人の果てぞゆかしき

(後拾・恋一・六五七・永成法師)

⑱ 年を経て葉がへぬ山の椎柴やつれなき人の心なるらん

(後拾・恋一・六六二・右大臣(顕房))

⑲ 逢ひみての後こそ恋はまさりけれつれなき人を今はうらみじ

(後拾・恋二・六七四・永源法師)

⑮は、恋しいということを知らないで終つただろう、「つれなき人」がこの世にいなかったならば、とする。これは、『拾遺集』の⑭「音のみ聞きつる恋を人知れずつれなき人にならひぬるかな」と同工である。ともに「つれなき人」によって、恋を知らされたとする発想になるが、⑭は自身に回帰する歌であった。これに対して、⑮は恋の相手に向かう対他性がある。この歌は「題不知」として入集していて詠歌事情は不明だが、題詠の可能性もあり、詠者永源法師からすれば実際の贈歌に供されたのかどうかになる。新大系は「薄情な恋人のお蔭で恋情の痛切であることを知ったのだと自ら慰める歌。薄情な当の相手に送つたとすれば、痛烈な皮肉となる」としている。また、「恋の気持を十分に味わわせてくれたあなた、と皮肉るのだが、着想、表現ともに平凡」(和泉古典叢書5)とする見方もあるが、相手への皮肉を認める点で、すなわち対他性で共通している。ここはやはり、対他的な相手への皮肉を認めるべきであろうし、そこに『後拾遺集』以降の「つれなき人」詠としての位置付けが可能となる。

⑯は、「つれなき人」も「あはれ」と言ってくれるでしょう、恋しさの程を知らせさえすれば、とする。これも『古今集』の⑤「月影に我が身をかふるものならばつれなき人もあはれとや見む」と同工である。しかし、⑯では自身の深い恋情を知らせた時、「つれなき人」がどうなるかを主題にしており、ここにも対他性を認めるべきであろう。

「つれなき人」詠の対他性は、さらに⑰でより強まっている。恋死にする自身の命はともかく、「つれなき人」の末路が知りたいとして、相手への恨みを詠んでいる。恋の相手の行く末が問題にされているのであり、また、恨みの情を顕在化している。相手への恨みつらみは、『後撰集』の⑫「忘れなんと思ふ心のやすからばつれなき人を恨みまじやは」などに詠出されてはいた。しかし、これも「忘れなんと思ふ心」に焦点があり、相手への直接的な恨みを表出するものではなかった。『後拾遺集』になって「つれなき人」詠に恨みが主題化されたといえよう。この点を逆説的に提示するのが、⑲になるようである。なお、⑱は『千載集』の所で見ることになる。

⑲「逢ひみての後こそ恋はまさりけれつれなき人を今はうらみじ」には、「つれなき人」がいつの時点の人とするかで解釈に相違がある。逢う以前とするものに、「あひみてのちの心の心」と、逢うまで「つれなき人を恨んでいた心」と比べたのちの表現である。逢つてくれない人を恨んでいたけれど、もう恨むまい。その時もつらかったが、逢つた後の苦しさ比べると物の数ではないと知ったから、と、すでに苦しみの質の変わったことを体験しての表現である」(公訳注)とするのと、「逢つた後こそ恋心は募るもの、冷たかったあなたを今は恨むまい。※逢瀬後の後の気持を以前と比較する型の一首。：逢瀬後の後の恋情の高まりを言うか」(和泉古典叢書5)とするのがある。両方ともここでの「つれなき人」を逢瀬以前の人としているが、前者は逢瀬以後の恋の苦しみを見、後者は逢瀬以後の恋の高まりを見ている。「つれなき人」を逢瀬以後の現時点のものとするのは、「つれなくされればこの激しい恋心も醒めるだろうから、つれない恋人を恨むまいと自身を慰める心」(新大系)とする

もので、恋の苦しみを読み取り、さらに「慰める心」の所在を指摘している。「つれなき人」を逢瀬が可能となった以前の、片恋の段階とするのは、これまで検討してきた例からすると無理であり、その場合には「つれなかりける人」になろう。いずれの「つれなき人」も現時点での人であった。そうすると、この歌は、逢瀬以後に「つれなき人」になったのであり、主題はそれゆえに増した恋の苦しみであろう。そうなれば、この歌は「逢ひて逢はぬ恋」であり、「つれなき人」を言うことで「逢はぬ」を表現していることになる。そして、「逢ひて逢はぬ恋」の恨みがあるゆえに、あえて「今は恨みじ」として逆説的に表現していることになる。恨みが主題なのである。

『後拾遺集』の用例をこうして見てみると、「つれなき人」の意味がややずれてきていると言えよう。三代集などにあつた時間の経過や、背景に想定されたドラマ性が後退し、「つらき人」と同義のように使用されている。「つらき人」は『後拾遺集』では皆無である。「つらき人」と同義になるから、恨みの情が詠まれ、対他的な志向性が強くなるのである。こうした点が『後拾遺集』の「つれなき人」詠の特徴として把握できよう。

* * *

『金葉集』『詞花集』には、それぞれ二首ずつの用例がある。この四首は概略だけとっておきたい。

⑳ 恋すてふ名をだにながせ涙川つれなき人も聞きやわたると

(金葉・恋上・三五九・よみ人知らず)

㉑ 知るらめやよどの継橋よとともにつれなき人を恋ひわたるとは

(金葉・恋上・三七四・長実卿母)

㉒ 我が恋は夢路にのみぞ慰むるつれなき人もあふと見ゆれば

(詞花・恋上・一九三・藤原伊家)

㉓ 身の程を思ひ知りぬることのみやつれなき人の情けなるらん

(詞花・恋上・二〇九・隆縁法師)

『金葉集』は独自の志向性を持ち、新たな歌語や素材、あるいは発想

が取り入れられているが、「つれなき人」も、その点に同調している。㉑は、『後拾遺集』の⑬「つれもなき人もあはれといひてまし恋する程を知らせだにせば」と発想に近いが、「恋の名が立つことを恐れるのが普通なのに、それすら厭わないほど一途だというのが趣向」(新大系)とする通りであろう。「名の立つ恋」の発想を逆手に取っているのである。㉒は、「夜殿」と「淀野」の掛詞があり、これは『後拾遺集』にも見られる(二二二・二二〇三番歌など)が、さらに「淀の継橋」として、「つれなき人」と結合させている。ここが新機軸なのである。

『詞花集』は、『拾遺集』や『後拾遺集』時代の歌人を多く含んだことよって、詠風も前時代的になっている。㉑の藤原伊家は『後拾遺集』初出の歌人である。新大系が類歌として挙げる、「夢をだにかでかたみに見てしがな逢はで寝る夜の慰めにせむ」(拾遺・恋三・八〇八・人鷹)と同工であろう。㉓は、『後拾遺集』の⑲「逢ひみての後こそ恋はまさりけれつれなき人を今はうらみじ」とどことなく近く、「つれなき人を今はうらみじ」が「つれなき人の情けなるらん」になった趣である。しかし、「つれなき人」のあり方を問題にする点で、『千載集』に繋がる面があるようである。

五 『千載集』の「つれなき人」

『千載集』になって、また詠風が多様化し、変容するようであり、詠歌数も『古今集』と等しく八首を数える。多様性、抒情性が『千載集』で指摘されるが、「つれなき人」詠もそのようである。

㉑ 荒磯の岩にくだくる浪なれやつれなき人にかくる心は

(千載・恋一・六五三・待賢門院堀川)

㉒ つれもなき人の心や逢坂の関路隔つる霞なるらん

(千載・恋一・六六九・賀茂重保)

㉓ いかで我つれなき人に身をかへて恋しきほどを思ひ知らせん

(千載・恋二・七二二・徳大寺左大臣)

② 恋ひ死なん命を誰に譲りおきてつれなき人のはてを見せまし

(千載・恋二・七二一・俊恵法師)

③ ひとかたに靡く藻塩の煙かなつれなき人のかからましかば

(千載・恋二・七三二・平忠盛朝臣)

④ 逢ふ事のかく難ければつれもなき人の心や岩木なるらん

(千載・恋二・七五八・賀茂政平)

⑤ よとともにつれなき人を恋草の露こほれまず秋の夕風

(千載・恋二・七七二・藤原顕家朝臣)

⑥ つれもなくなりぬる人の玉梓を憂き思ひ出での形見ともせじ

(千載・恋二・七八二・藤原長能)

『千載集』の「つれなき人」詠は、三点において新しい。一つは、「つれなき人」の心などを物象語で例えて抒情性を表現していくものが多いこと、二点目は『後拾遺集』以上に「つれなき人」のあり方を問題にしていること、三点目は新古今調を予感させることである。

まず一点目、恋の相手である「つれなき人」や自身の心を物象語で例えることによって、恋の様態を抒情的に解釈し、表現しようとする発想である。発想の先蹤としては、『古今集』の、⑨「忘れ草何をか種と思ひしはつれなき人の心なりけり」があり、『後拾遺集』にも、⑩「年を経て葉がへぬ山の椎柴やつれなき人の心なるらん」があった。「つれなき人の心」が、それぞれ「忘れ草の種」や「年を経て葉がへぬ山の椎柴」に例えられていた。こうした発想を受けて、『千載集』では多様に「心」が問題にされている。⑪⑫⑬⑭⑮⑯⑰⑱⑲⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿がそれぞれであり、傍線を付した箇所、「荒磯の岩にくだくる浪」「逢坂の関路隔つる霞」「ひとかたに靡く藻塩の煙」「岩木」などが例えとなる物象語の部分になる。

②は、「風をいたみ岩打つ波のおのれのみ砕けて物を思ふころかな」(詞花・恋上・二二一・源重之)を踏まえ、「荒磯の岩にくだくる浪」が、「つれなき人」に思いをかける自身の「心」の例えである。ここは「荒磯の岩」が「つれなき人」の例えともなっており、そうであることで思いを訴えても動じない様が捉えられ、自身の「心」は、「くだくる浪」

さながら、千々に砕け散るのである。岩のように動かない「つれなき人」にかかわる自身の心は「荒磯の岩にくだくる浪」ではないかとされて、成就しない恋の様態が解釈されている。この②は、自身の心が問題にされたが、⑤は「つれなき人の心」が捉えられている。歌語の霞は、男女の間を隔てるものとして機能しているが、ここもその用法通りになり、「逢坂の関路隔つる霞」が言われて、その霞が「つれなき人の心」ではないかと解釈されている。⑥は、「風吹けば藻塩の煙片寄りに靡くを人の心ともがな」(詞花・恋上・二二八・藤原親隆)を踏まえることで、「心」の語はなくても「つれなき人」の「心」が問題にされていよう。「ひとかたに靡く藻塩の煙」が「つれなき人」の「心」であつたらと願うのである。⑦も⑧と同じ詠風であり、「逢ふ事のかく難ければ」から「堅し」を導き、その縁で「つれなき人の心」は情を解さない「岩木」ではないかとしている。以上、「心」を物象語で例えて問題にすること、あらたな詠風がもたらされたと言えよう。

特徴の二番目は、「心」以外の形で、「つれなき人」のあり方などを問題にしているもので、⑳㉑㉒㉓㉔㉕㉖㉗㉘㉙㉚㉛㉜㉝㉞㉟㊱㊲㊳㊴㊵㊶㊷㊸㊹㊺㊻㊼㊽㊾㊿などになる。㉑「いかで我つれなき人に身をかへて恋しきほどを思ひ知らせむ」は、「恋するは苦しきものと知らすべく人を我が身にしばしなさばや」(拾遺・恋二・七五三・よみ人知らず)と同工であり、何とかして「つれなき人」に恋しい思いを味わせたいのである。それというのも「つれなき人」に執着するからになるが、㉒になると恨みの情が深まって「つれなき人」の末路が問題にされる。この㉒「恋ひ死なん命を誰に譲りおきてつれなき人のはてを見せまし」は、『後拾遺集』の⑰「恋死なむ命はことの数ならでつれなき人の果てぞゆかし」をもう少し理屈だたせたものとなっている。「つれなき人」への執着が逆説的に表現されて、報いの末路を命を譲った誰かに見届けさせたいとしているようだが、違う解釈もある。「死後もなお關心を持たざるを得ない心を詠んだものであり、もし報いのかんの気持ちがあるとする、むしろ報いを受けはしまいかと心配なので目を放せないという心を詠んだ歌」(和泉古典叢書8)とするものだが、ここは先の

ように解しておきたい。残る③「つれもなくなりぬる人の玉梓を憂き思ひ出での形見ともせじ」は、「つれもなくなりぬる人」の手紙を辛い思い出の形見とするまいとするもので、すでに諦念に達しようとする段階にきており、執着を断止しようとするのである。

新古今調を予感させるのは、④「よとともにつれなき人を恋草の露こほれます秋の夕風」と体言止めにする歌になる。「つれなき人を恋う」から「恋草」への移行や「露こほれます」とする措辞、あるいは『千載集』初出とされる「秋の夕風」という景物などに新古今調が予感できるのではないだろうか。最後に『新古今集』を見てこの稿を終りにしていきたい。

六 『新古今集』の場合

『新古今集』になると、「本歌取り」の技巧が定着し、対象のあり方の本来を重視する「本意」が重要視されるようになるが、二首ある「つれなき人」詠も、その傾向と合致している。

②つれもなき人の心のうきにはふ葦の下根のねをこそは泣け

(新古・恋一・一〇七六・権中納言師俊)

③つれもなき人の心は空蟬のむなしき恋に身をやかへてん

(新古・恋一・一一四六・八条院高倉)

それぞれの本歌は、次の歌が指摘されている。

葦根はふうきは上こそつれなけれ下はえならず思ふ心を

(拾遺・恋四・八九三・よみ人知らず)

うちはへてねを鳴き暮らす空蟬の空しき恋も我はするかな

(後撰・夏・一九二・よみ人知らず)

③は「つれもなき人の心の愛き」から「漣」を、④は「つれもなき人の心は空蟬のむなしき」から「むなしき恋」をそれぞれ導いている。両歌とも『千載集』の歌のように「つれなき人」を恨むのではなく、③は「葦の下根」に託して忍び泣きする様を言い、④は「つれなき人の心」

を空蟬のように空しいとしつつ、空しき片恋のために身を引き換えにしてしまうのかと嘆きの情調にしている。対他的ではなく対自的に詠出することで、「本意」となる三代集的な発想にもどrittつ、新古今調にしていると言えよう。歌ことばと認定できる「つれなき人」詠にも、それなりの変遷が認められるのである。

おわりに

八代集に見られる「…人」表現を整理して、一番用例の多い「つれなき人」詠の概略をたどってきた。八代集の詠風は、古今調が形成されてから、『後拾遺集』あたりで変容し、『千載集』で多様化していた。そして新古今調の形成となっていた。その実際の概略を「つれなき人」詠で見えたことになる。この表現が継続して使用されていたからこそ、概観が可能であった。以上の検討に誤読があるかも知れないが、さらにこうした表現性をたどる必要性があるように思える。

注

(一) 筆者の『源氏物語』における「…人」表現論の所在は、拙著『わが身をたどる表現』論「源氏物語の膠着語世界」(武蔵野書院、一九九五年十一月)の「あとがき」に一覧を載せた。また、『狭衣物語』は、拙著『狭衣の恋』(翰林書房、一九九九年十一月)で扱った。併せて参照されれば幸いである。